

明治後期の和語系・漢語系オノマトペ

中 里 理 子*

(平成十二年十一月二十八日受理)

要 旨

明治後期の小説二〇作品を対象に、和語系・漢語系オノマトペの使用状況を調査し、前期からの流れを考慮しながら両者の関係を具体的に考察した。後期になると和語系オノマトペの割合が増え、漢語・漢字を宛てずに単独で使われるようになったことから、俗語である和語系オノマトペが小説の言葉として抵抗感なく取り入れられるようになったことが窺われた。また、漢語系のオノマトペとしての意識について、和語系に漢語系を対応させる宛て字の面から、特に多く見られたそれぞれのオノマトペの型を中心に考えた。和語系に宛て字されていた漢語系は、和語系が独立すると、一般語彙として「オノマトペ」性を失ったが、音構成が和語系のものと同じ「一タ」型は、限られた文脈で多用されたものが音のイメージを連想させるようになり、「オノマトペ」として捉えられるようになると思われる。

KEY WORDS

和語系オノマトペ Onomatopoeia of Japanese Origin 漢語系オノマトペ Onomatopoeia of Chinese Origin
宛て字 Substitute Character 振り仮名 KANA Written at the Right Side of KANJI オノマトペの型 Types of Onomatopoeia

はじめに

前回、明治前期のオノマトペ^①の使用状況を調査した結果、漢語系のもの割合が比較的高く、言文一致文においては俗語として和語系オノマトペを多く取り入れながら、和語系のものだけでは表現しきれない部分を漢語系のもので補ったらしいことが窺われた。これは言文一致の文章を書く上で「和語の語彙が少ない」^②欠

点を解消しようとしたことの表れであろう。また、漢語に和語系オノマトペの仮名を振るものも多く見られたが、これはむしろ和語系オノマトペに漢語を宛てたと考えるべきで、細かい意味の違いを漢語の表現力を借りて表そうとしたものと考えられる。

今回は、小説の文章で言文一致文が定着した明治三〇年代以降に調査対象を移し、和語系・漢語系オノマトペの使用状況の変化

* 言語系教育講座

と両者の関係を具体的に見ていきたい。特に、漢語に和語系オノマトペの振り仮名を宛てているものに注目し、両者の関係を考えたい。

一 調査資料とオノマトペの分類

調査対象としたのは、明治三〇年代以降の小説で、次の二〇作品である。

- 「くれの廿八日」内田魯庵・31年 「初航海」櫻井鷗村・32年
- 「初すがた」小杉天外・33年 「女難」國木田独歩・36年
- 「坊っちゃん」夏目漱石・39年 「破戒」島崎藤村・39年
- 「野菊の墓」伊藤左千夫・39年 「平凡」二葉亭四迷・40年
- 「蒲団」田山花袋・40年 「新世帯」徳田秋声・41年
- 「芋掘り」長塚節・41年 「春」島崎藤村・41年
- 「すみだ川」永井荷風・42年 「田舎教師」田山花袋・42年
- 「南小泉村」真山青果・42年 「統風流懺法」高浜虚子・42年
- 「別れた妻に送る手紙」近松秋江・43年
- 「放浪」岩野泡鳴・43年 「微光」正宗白鳥・43年
- 「青年」森鷗外・43〜44年

和語系・漢語系オノマトペの分類は前回の調査と同じく以下の通りである。

〈和語系〉

- A 仮名表記 例 スラリ はらく
- B 漢字を宛てる

1 漢字の意味を対応させる

a 漢語系オノマトペを宛てる

〈漢語系〉

- C 漢字表記(和語の振り仮名無し) 例 滔々 悄然
- D 仮名表記 例 リウと
- E 和語系オノマトペの仮名を振る 例 肅然(しめやかに)

また、漢語系オノマトペの判断基準については、前回同様『擬音語・擬態語辞典』(角川書店)の解説にある金田一春彦氏の分類に拠る。

分類にしたがって各作品のオノマトペを拾い出し、異なり語数、延べ語数をまとめたのが表1である。必要に応じて語数の下に総数に対する割合(単位は%・少数第二位を四捨五入)を示した。前期の作品と比較するために、前回調査した言文一致の作品から、「浮雲一・二・三篇」(二葉亭四迷・19〜22年)、「薄命のすず子」(嵯峨の屋おむろ・21年)、「露子姫」(石橋忍月・22年)、「白玉蘭」(山田美妙・24年)、「小公子」(若松賤子・25年)の五作品についてまとめたものを下段に加えた。

二 和語系・漢語系のオノマトペ

二一 和語系と漢語系の割合

表1で和語系(A・B)と漢語系(C・E)の割合を見ると、

例 燦々(きら／＼) 茫然(ぼんやり)

b a以外 例 偶(ふと) 淡泊(あつさり)

2 漢字の音を借りる

例 狐鼠々々(こそ／＼) 丁(ちゃん)と

3 漢字の音訓と意味を借りる

例 驚(ぎよつ)と 浮々(うか／＼)

C 漢字表記(和語の振り仮名無し)

例 滔々 悄然

D 仮名表記

例 リウと

E 和語系オノマトペの仮名を振る

例 肅然(しめやかに)

明治前期の五作品では和語系が八割前後であったのに対し、後期の二十作品では多くが九割前後になっており、和語系オノマトペの使用率が上がり、漢語系オノマトペの割合が減少したことがわかる。作品によってはほとんど漢語系を使っていないものもあり、二十年代の言文一致の文章とは明らかに語彙選択の意識が変わっているといつてよいだろう。三十年代後半以降は、和語を俗語として卑しむという意識も薄れ、言文一致の文章で積極的に取り入れていったことが、オノマトペの面からも窺われる。

ここで問題となるのは、分類B1～B3の漢語・漢字を宛てる和語系オノマトペである。作品によってはB1～B3の割合が高く、Aの割合が前期の作品よりも低いものがある。仮名書きで表記せずに漢字を宛てるということは、漢字の表意性に頼り、和語系オノマトペの意味を漢語の表現力で補っているということでもある。作品の中で使われ方を見ると、和語を主としながら漢語を補っているようすがよく分かる。「吃驚する」「莞爾して」のよな慣用的なものはもちろん、「巖然した顔」(初すがた)「瀟洒したいい所」(微光)のように、振り仮名を外した漢語の音読みでは言葉足らずになってしまいう例が多く、振り仮名つまり和語系オノマトペを主とする意識が働いている。一方、明治前期と同様に同じ作品中で漢語によって意味を使い分けているものがある。

へぼんやりへ・何かしら朦朧した輪のやうな物の中から

・何を茫然考へてゐるんです。

へはつきりへ・判然と心に映るものは少なかった。

・寫眞としては明瞭した方で

へありありへ・長田の性質が歴然と出てゐる。

・その言葉聞きながら顔色を見てみると、…(中略) …といふ心が歴々と見える。

(新世帯)

(春)

・此方の眼に映った眉毛、…(中略) …くくれの出来た手首などが、明歴と浮き上がって忘れられない。
(別れた妻に送る手紙)

「ぼんやり」には「物の形がよく見えない様子」と「意識が集中していない様子」の使い分けが、「はつきり」には「曖昧な所がなく確か」の意味と「鮮明で明らか」の意味の使い分けが見られる。「ありあり」の「歴然」「歴々」に大きな違いは見られないが、「明歴」は同じ作品の別の箇所です。「まざ(と)」という振り仮名になっており、「はつきり外に現れている」意味と「はつきり思い出される」意味(「まざと(まざまざ)」に対応する意味)とを使い分けていることがわかる。

このように和語を用いながら漢語・漢字に頼る傾向が、明治後期にどのくらい見られるのかを考えるために、B1～B3について、全体数に対する割合とA(漢字を宛てない和語系)に対する比率を出し、表1に加えた。これを見ると、後期のいくつかの作品ではB1～B3の割合が非常に高く、漢字の表現力を捨てきれない作家達もいることを表しているようである。だがそれらを除いた全体的傾向を見ると、後期になってB1～B3の割合が低くなっていくことから、和語系のものだけで単独に表現する傾向になっていくと考えられる。和語系オノマトペが、漢語の助けを借りずに小説の言葉として認められるに至ったことの表れと見てよいだろう。和語系オノマトペ単独の使用が増加したことに關しては、例外的な作品も含めて別項で検討する。

二―二 和語系オノマトペと漢語系オノマトペの対応

前項で問題としたB1～B3のうち、和語系オノマトペに漢語

表 1

	A		B1a	B1b	B2	B3	C		D	E	AB		C~E	総数	B1~B3	A:B										
	異	延					異	延			異	延					異	延								
くれの	96	121	40	82	28	68	5	5	13	31	81	111	0	0	10	19	182	307	91	130	273	437	86	186	0.90	1.54
	35.2	27.7									29.7	25.4					66.7	70.3	33.4	29.7				31.5	42.6	
航海	116	202	6	10	2	2	0	0	1	3	16	26	0	0	1	1	125	217	17	27	142	244	9	15	0.08	0.07
	81.7	82.8									11.3	10.7					88.0	88.9	11.8	11.1			6.3	6.1		
初姿	112	267	17	56	14	40	3	23	4	4	8	10	0	0	8	13	150	390	16	23	166	413	38	123	0.34	0.46
	67.1	64.6									4.8	2.4					90.3	94.4	9.6	5.6			22.9	29.8		
女難	43	52	6	7	2	2	1	1	4	4	8	9	0	0	5	10	56	66	13	19	69	85	13	14	0.30	0.27
	62.3	61.2									11.6	10.6					81.2	77.6	18.8	16.5			18.8	16.5		
坊ちや	132	205	2	2	4	9	3	5	7	7	20	36	0	0	1	1	148	228	21	37	169	265	16	23	0.12	0.11
	78.1	77.4									11.8	10.6					87.6	86.0	12.4	14.0			9.4	8.6		
破戒	101	256	24	55	17	59	3	6	5	28	37	80	0	0	16	38	150	404	53	118	203	522	49	148	0.48	0.58
	49.8	49.0									18.2	15.3					73.9	77.4	26.1	22.6			24.1	28.4		
野菊	48	65	1	1	0	0	1	1	3	3	8	11	1	1	0	0	53	70	9	12	65	82	5	5	0.10	0.08
	73.8	79.3									12.3	13.4					81.5	85.4	13.8	14.6			7.6	6.0		
平凡	177	320	47	105	24	75	7	14	16	36	20	28	0	0	6	19	271	550	26	47	297	597	94	230	0.53	0.71
	59.6	53.6									6.7	4.7					91.2	92.1	8.7	7.9			31.6	38.5		
蒲団	50	75	3	5	2	5	1	1	2	4	11	15	0	0	2	3	58	90	13	18	71	108	8	15	0.16	0.2
	70.4	69.4									15.5	13.9					81.7	83.3	18.3	16.7			11.3	13.9		
新世帯	119	168	22	41	13	28	3	7	3	4	4	10	0	0	4	13	160	248	8	23	168	271	41	80	0.34	0.48
	70.8	62.0									2.4	3.7					95.2	91.5	4.8	8.5			24.4	29.5		
芋掘り	88	118	0	0	0	0	1	1	3	3	6	8	0	0	0	0	92	122	6	8	98	130	4	4	0.05	0.03
	89.8	90.8									6.1	6.2					93.9	93.9	6.1	6.1			4.1	3.3		
春	108	166	19	33	8	19	0	0	4	9	36	47	0	0	0	0	139	227	36	47	175	274	31	61	0.29	0.37
	61.7	60.6									20.6	17.2					79.4	82.8	20.6	17.2			17.7	22.3		
すみだ	59	84	2	2	3	3	2	3	0	0	8	23	0	0	1	1	66	92	9	24	75	116	7	8	0.12	0.09
	78.7	72.4									10.7	19.8					88.0	79.3	12.0	20.7			9.3	6.9		

田舎	182	401	10	29	1	10	0	0	5	9	33	52	0	0	1	1	198	449	34	53	232	497	16	48	0.09	0.12
	78.4	80.7									14.2	10.5					85.3	90.3	14.7	10.7			6.9	9.7		
南小泉	143	202	2	2	9	34	2	3	4	4	5	5	0	0	0	0	160	245	5	5	165	250	17	43	0.12	0.21
	86.7	80.8									3.0	2.0					97.0	98.0	3.0	2.0			10.3	17.2		
続風流	40	52	0	0	1	1	0	0	2	2	6	7	0	0	0	0	43	55	6	7	49	62	3	3	0.08	0.06
	81.6	83.9									12.2	11.3					87.8	88.7	12.2	11.3			6.1	4.8		
別れた	88	141	14	30	12	41	2	2	5	7	3	4	0	0	0	0	121	221	8	11	129	232	33	80	0.38	0.57
	68.2	60.8									2.3	1.7					93.8	95.3	6.2	4.7			25.6	34.5		
放浪	135	224	0	0	0	0	1	1	3	5	8	19	0	0	0	0	139	230	8	19	147	249	4	6	0.03	0.03
	91.8	90.0									5.4	7.6					94.6	92.4	5.4	7.6			2.7	2.4		
微光	59	83	3	6	1	5	0	0	6	10	2	2	0	0	0	0	69	104	2	2	71	106	10	21	0.17	0.25
	83.1	78.3									2.8	1.9					97.2	98.1	2.8	1.9			14.0	19.8		
青年	93	233	1	1	0	0	0	0	1	1	26	60	1	2	0	0	95	235	27	62	122	297	2	2	0.02	0.01
	76.2	78.5									21.3	20.2					77.9	79.1	22.1	20.9			1.6	0.7		
浮雲 1	111	186	17	35	7	25	2	2	8	21	22	24	1	1	4	5	145	269	27	30	172	299	34	83	0.31	0.45
	64.5	62.2									12.8	8.0					84.3	90.0	15.7	10.0			19.8	27.8		
浮雲 2	99	237	20	38	4	11	2	3	7	7	45	69	0	0	6	12	132	296	51	81	183	377	33	59	0.33	0.25
	54.1	62.9									24.6	18.3					72.1	78.5	27.9	21.5			18.0	15.6		
浮雲 3	72	114	13	26	4	4	3	3	8	8	17	22	0	0	8	12	100	155	25	34	125	189	28	41	0.39	0.36
	57.6	62.9									13.6	11.6					80.0	82.0	20.0	18.0			22.4	21.7		
すず子	48	61	5	14	2	2	1	1	3	3	14	18	0	0	3	4	59	81	17	22	76	103	11	20	0.23	0.33
	63.1	59.2									18.4	17.5					77.6	78.6	33.4	21.4			14.5	19.4		
露子姫	54	94	1	2	5	6	0	0	1	1	16	19	0	0	1	1	61	103	17	20	78	123	7	9	0.13	0.10
	69.2	76.4									20.5	15.4					78.2	83.7	21.8	16.3			9.0	7.3		
白玉蘭	133	236	7	9	6	10	4	7	9	21	39	60	0	0	0	0	159	283	39	60	198	343	26	47	0.20	0.20
	57.6	68.8									16.9	17.5					80.3	82.5	19.7	17.5			13.1	13.7		
小公子	123	325	7	9	0	0	1	1	7	13	32	56	2	2	5	8	138	348	39	66	177	414	15	23	0.12	0.07
	69.5	78.5									18.1	13.5					78.0	84.0	22.0	16.0			8.5	5.6		

系のものを対応させるB1aについて詳しく見てみたい。先に見たように後期の全体的傾向としては漢語を宛てるものが減少しているの、B1aが多く見られた八作品(①くれの廿八日・②初すがた・③破戒・④平凡・⑤新世帯・⑥春・⑦田舎教師・⑧別れたる妻に送る手紙)を中心に考えていく。

和語系と漢語系の対応で特徴が見られないかどうか、それぞれのオノマトペの型を見ると、振り仮名の和語系では「しつかり」「しよんぼり」などの「〇つ〇り・〇ん〇り」型と「ひそひそ」などの「〇×〇×」型が、漢語系では「一然」型と「一々」型が多く見られた。①⑧について、B1aの異なり語の総数(漢語と和語の対応が異なっているものすべて)とそれぞれの型の異なり語数を表2に示す。また参考に、分類A(漢語を宛てない和語)の「〇つ〇り・〇ん〇り」型と「〇×〇×」型、分類C(和語を振らない漢語)の「一然」型と「一々」型の異なり語数を表3に挙げておく。

表2 「〇〇〇り」は「〇つ〇り・〇ん〇り」型の総称

	一々	一然	〇×〇×	〇〇〇り	B1a	
	12	22	20	20	53	①
	4	12	6	7	21	②
	7	10	6	12	26	③
	14	23	22	13	52	④
	11	7	11	8	21	⑤
	6	5	7	8	18	⑥
	7	1	9	2	11	⑦
	4	6	7	5	13	⑧

まず和語系の「〇つ〇り・〇ん〇り」型と「〇×〇×」型を見

表3

一々	一然	〇×〇×	〇〇〇り	
33	28	33	8	①
1	4	37	4	②
8	13	43	13	③
2	10	75	13	④
2	0	67	11	⑤
10	16	52	12	⑥
11	10	102	22	⑦
2	0	29	11	⑧

て見ると、全体(表3)では「〇×〇×」型が圧倒的に多いのに対し、B1aでは「〇つ〇り・〇ん〇り」型の割合が総じて高いことがわかる。「〇×〇×」型の多くはそのままオノマトペとして使われているが、「〇つ〇り・〇ん〇り」型の場合には漢語で意味を補ったものが多いことが窺われる。漢語を宛てるということは、漢語系でも代替可能なものであったことになり、「〇つ〇り・〇ん〇り」型の場合、多くが和語系と漢語系とで同じ意味を表すものが並立している状態だったと言える。現代語のオノマトペの型別割合を調査した福田泉氏の資料によると、「AツBリ形」が「使用度数の高い語を多く保有している」という。当時においてもその傾向が見られるとすれば、「〇つ〇り」型は、一般的によく使う語であって、対応する漢語と比べてより俗語的なイメージを持つ語であったために、漢語を宛てて使ったとも考えられる。

次に漢語系のものを見ると、全体(表3)でも「一然」型の割合が高く、それに応じてかB1aも「一然」型の割合が高いものが多い。漢語の「一然」型は、漢字の意味を存分に生かし、幅広い表現力を持たせることのできる語であったのだろう。和語系オノマトペの意味を十分に補い、細かい描写を可能にしなから、や

がて並立していた和語系のものが独立して使用され、漢語系を宛てずに使うようになっていく過程で、和語系のものがオノマトペとして意識されていき、漢語系のもので一般語彙として、ようすを生き生きと表現するという「オノマトペ」性を失っていったのだらう。

明治期の「一然」型の漢語について、小野寺学氏は、初期には使用率が低く、中期には使用が増加して「字音」（音読み）と「熟字」（和語の漢字表記）の間で揺れが見られ、後期には字音化の傾向が強くなると述べている。B1aで「一然」型の割合が高いことを考え合わせると、後期になって「一然」型の字音化の傾向が強くなることと、和語系のものに漢語系を宛てる傾向が減少したことは、密接に関連しているだらう。

「○つ○り・○ん○り」型と「一然」型の関連を見ると、それぞれが対応している例はそう多くはない。異なり語数だけ示すと①12、②4、③6、④6、⑤4、⑥4、⑦0、⑧3となっている。慣用的なものも含め、「一然」型に対応するものは次項で考察する。

二一三 漢語系オノマトペの「オノマトペ」性

漢語系オノマトペがどの程度オノマトペとして意識されているかについて、これだけの資料だけではどうも判断できるものではないが、前項との関わりから「一々」「一然」型を中心に若干の検討を試みたい。

漢語系オノマトペの中で和語系オノマトペと混同されやすいもの、すなわちよりオノマトペ的であるものは、和語系オノマトペの型と音の構成が一致する「一々」型のものであろう。明治三五年の『新美辭學』¹⁰では「譬喩法」の「事物の動作を摸すと思へるもの」の例に、「ゆうく」と立ち出づる「ぐさと突き込む」の二

例を挙げている。「ぐさと」という和語系オノマトペと並列させて「ゆうゆう（悠々）」とという漢語系ものを挙げているところに、漢語系のある種のものがオノマトペとして意識されていることが窺われる。そこで、後期二〇作品の漢語系オノマトペで「一々」型のものうち、「悠々」のように「オノマトペ」らしいものを恣意的ではあるが拾い出してみた。（ ）内は何作品に見られたかを示した数である。（ ）のないものは一作品のみに見られたことを示す。

快々 轟々 昏々 懇々 (4) 滾々 深々 諄々 喋々
滔々 (3) 堂々 (4) 沸々 (2) 蓬々 (2) 満々
濛々「濛々」(2) 悠々 (7) 縷々 (2)

調査範囲内だけでも二作品以上に用例が見られるものは、全体でも使用頻度が高かったと考えてよいだらう。『新美辭學』に例が挙がっている「悠々」は特に頻度が高い。「一々」型において、多用される語が「オノマトペ」らしさを獲得すると考えてよいのだろうか。

例えば、「濛々と立つ煙」「髪が蓬々だ」「夜が深々と更ける」「昏々と眠り続ける」のように、限られた文脈で使われるうちにその語のイメージが定まり、いかにもそれらしい感じを受けるといふ錯覚、つまり言語音と指示内容に有縁性を感じるという錯覚を起こすことは考えられるだらう。そこからさらに、漢字ではなく仮名書きがされるようになれば、漢字の表意性が薄れ、純粹に音のイメージで使用されると判断してよいだらう。前回の調査では、江戸期の作品も含めて「しんしんと・まんまんと・べんべんと・ゆうゆうと」など仮名書きのものがあり、既にオノマトペとして意識されていたらしいことが推測されたが、今回の調査では、上記

のものに関しては仮名書きの例はなかった。時代が下って仮名書きのものも見られるようになれば、漢語系であっても和語系と同様にオノマトペらしさを持つと考えてよいだろう。今回の調査で仮名書きのものは「ろくろく（碌々）」の一語があったが、「ろくろく」が附かなかつた（青年）のような打消語と対応する陳述副詞として使用されており、オノマトペとは判断しがたいものである。

次に、「一然」型を中心に「一々」型以外のものについて考えてい。「一々」型以外の漢語系オノマトペについて、後期二〇作品のうち、二作品以上に見られたものを挙げる。（一）内は用例の見た作品数である。

- 偶然（4） 悄然（3） 斷然（6） 突然（8）
- 叮嚀〔丁寧／鄭寧〕（14） 漠然（4） 判然（5）
- 憤然（2） 平然（2） 茫然（6） 朦朧（5）
- 默然（5） 悠然（2） 冷然（4）

これらは現在でもよく使う漢語であり、オノマトペとして意識することはほとんどないと言ってよい。「叮嚀」「平然」「冷然」「默然」以外は、次の（一）内に示す和語の振り仮名とともに使われることが多い。

- 偶然（ふつと） 悄然（しよんばり・すこすこ）
- 斷然（きつぱり） 突然（だしぬけに） 漠然（ぼんやり）
- 判然（はつきり・ちやんと） 憤然（むつと）
- 茫然（ぼんやり） 朦朧（ぼんやり・おぼろ）
- 悠然（ゆつたり）

この中で「突然」だけはオノマトペ以外の副詞と対応しており、

オノマトペとしては意識されていなかったと思われる。「突然」以外は和語系オノマトペに対応しているが、先に見たように、和語系のもので漢語の助けを借りずに抵抗なく用いられるようになること、それに宛てられていた漢語の方はオノマトペと意識されることなく、一般語彙と考えられるようになると思われる。「一々」型が、多用されてオノマトペ性を帯びるのに対し、「一然」型は振り仮名と併用されたために、オノマトペらしさを感じさせなかったのだろう。振り仮名のない「叮嚀」「平然」「冷然」「默然」のうち、「叮嚀」は「同じ拍を重ねる語（疊韻）」で、和語系のオノマトペの型には定着しにくい型である。和語系にも「あたふた」「どきまぎ」など疊韻に似た例があるが、「あたふた」は「あわてふためく」との関連、「どきまぎ」は「どきどきまごまご」との関連、といった他の語との関連が想像されるので、そのような連想が働かないものは定着しにくいのではないかと考えている。例えば「齷齪」は「あくさく・あくそく」から「あくせく」へと音も変わり、「急ぐ」という語との関連が連想されるので、和語系オノマトペに近い感覚で用いられると考えられる。「叮嚀」にはそのような連想が働きにくかったのではないだろうか。

「平然」「冷然」「默然」は人物描写に関わる語であるが、これらに相当する和語系オノマトペは、「平然」に対応する「しやあしやあと」ぐらいで、他に一般的なものはない。漢語系で多用される語に対しては、それに代わる和語系のもので発達しなかったのだろう。だからといって「平然」「冷然」「默然」がオノマトペとして意識されたとは考えにくい。「一然」という型が漢語であることを示しており、おそらく仮名表記もされていないと思われるためである。ただし「默然」は「もくねん」と振り仮名されることが多く、意識に揺れがあったと考えられる。明治前期に

も「もくぜん・もくねん」両様の仮名が見られたが、「もくねん」という読みは、他の「一然」型のものより和語系オノマトペの意識があるのではないだろうか。今回の調査で他に「徒然（つくねん）」「子然（ぼつねん）」の用例が見られたが、「つくねん」「ぼつねん」の二語は、時代が下ると仮名表記で使われることが多い語である。「一ねん」の語形は、漢語系オノマトペの中でも和語系オノマトペに近づいていると見られる。「ぼつ然」（坊ちゃん）という表記の例もあり、和語系と漢語系が重なりあう語形式ではないだろうか。

三 後期作品に見るオノマトペの特徴

二―一の最後で触れたように、和語系・漢語系オノマトペの使用の面から、後期の各作品の特徴を簡単に見ていきたい。

まず、漢語系使用率の高かった「くれの廿八日」だが、内田魯庵は、翻訳「罪と罰」（明治二五年）を当時としてはこなれた言文一致文で発表しており、二葉亭四迷とともに二〇年代に言文一致文の成立に貢献した作家である。二葉亭の「平凡」は漢語系使用率としては低いが、B1―B3の割合が高く、魯庵と同様和語に漢語の表現力を借りている。前回の調査で見たとように、「國民語の資格を得てゐない漢語は使はない」という二葉亭が、「浮雲」でも多く漢語に頼って文章を書いていた名残が、後期になっても現れている。二葉亭・魯庵のような明治前期の作家にとって、漢語のイメージ喚起力は捨てきれないものであったのだろう。

同じく漢語系の比率の高い「破戒」「春」は、B1―B3の割合も比較的高い。「春」は青木という青年の日記や文章の部分が漢文訓読調で書かれているため漢語系の使用が増えているが、それを

差し引いても、同時期に書かれた他作家の作品と比べて漢語系の割合が大きい。島崎藤村の漢語に対する意識が高かったことが窺われる。この点は、同じ自然主義作家の田山花袋と語彙選択の姿勢が異なっている。花袋の「蒲團」はやや漢語系の割合が高く、明治前期の文章の雰囲気を残しているようにも感じられるが、「田舎教師」になると和語系の割合が増え、和語系オノマトペを積極的に取り入れることが分かる。特に「田舎教師」では「ガタガタ」「ザクザク」「トントン」など擬音語の割合が高くなっている。和語系Aの異なり語数とそれの中の擬音語の異なり語数をいくつかの作品で見ると、「破戒」はAの一〇一語中に擬音語が二七、「野菊の墓」四八語中一一、「平凡」一七七語中七三、「新世帯」一一九語中二七、「芋掘り」八八語中二七、「春」一〇八語中二六、「南小泉村」一四三語中四六、「別れたる妻に送る手紙」八八語中三〇、「放浪」一三五語中二四に対し、「田舎教師」は一八二語中五八例であり、擬音語の割合が高い部類に入る。花袋が擬音語を多く用いて感覚描写をしようとしたことが窺われる。「田舎教師」は平面描写の成功した作品と言われるが、「見たま、聞いたま、觸れたま、の現象をさながらに書いた」「平面描写」の手法に関連するとも考えられる。

徳田秋声の作品は、漢語系の比率は低いがB1―B3の割合が高い。B1―B3のいわゆる宛て字には、「恍然（うつとり）」「埃々（ごみく）」「恂々（はらく）」「欣々（ほくく）」「勃然（むつくり）」など、二葉亭四迷や内田魯庵の作品と同じような明治前期の雰囲気漂っているが、これは紅葉門下にいた影響であろう。玉村文郎氏によれば、尾崎紅葉は「音象徴の和語に漢字（漢語）をあてるのに、実に多くの苦心をした」のだが、秋声も他の同時代の作家と比べて、全体数に対してB1―B3の異なり語数が多

いところに、宛て字を工夫しようとした意識が窺われる。他の自然主義の作家の作品、「南小泉村」「放浪」「微光」「別れたる妻に送る手紙」は、和語系の割合が高い。ほとんど漢語を使わずに和語の語彙（ときに俗語）を抵抗なく取り入れていくところに、言文一致創世期の作家や明治初年生まれ藤村・花袋・秋声と大きな違いがある。

写生文の作品である「野菊の墓」「芋掘り」「続風流懺法」も、同様に和語系オノマトペで表現される割合が高い。特に長塚節はオノマトペ使用の多い作家と言われるが、「芋掘り」にも「ざくつと」「ちよりちより」「ぼちりぼちり」など、個性的な生き生きしたオノマトペが見られる。

鷗外と漱石のオノマトペについては、一作品でその特徴を考えると難しいので、印象を述べるにとどめる。まずオノマトペが少ないと言われる鷗外¹⁸のものを表1で見ると、和語系でも漢語系でも述べ語数に比べて異なり語数が少ない。これは、複数回使われるものが多いことを表している。例えば和語系のもので「ふいと」「二一例」「はつきり」「一七例」「ふと」「一六例」「ちつと」「九例」などがあり、漢語系のものでは「突然」「二二例」「偶然」「八例」「躊躇」四例などがある。先の「芋掘り」に見たような、一回性で個性的な生き生きとした描写力を持つオノマトペは多くないという点でもある。

呉川氏は鷗外と漱石の漢語系オノマトペを調査し、漱石の場合、「堅い文語調の文章なら漢語のオノマトペに、くだけた口語体の文章なら、和語のオノマトペにと、意識的に使い分けをして表現しているように思われる」と述べている。「坊っちゃん」を見ると、和語系の割合が高く、「舟は磯の砂へざぐりと、軸をつき込んで」「尻の下でぐちゃりと踏み潰したのが一つ」など、オノマトペの

表現力を活かし、「くだけた口語体の文体」に合わせて効果的に使い分けをしたことがうなずける。

おわりに

以上、明治後期の小説作品に見る、和語系・漢語系オノマトペの関係について考察した。考察した結果を以下にまとめておく。

前期に比べて和語系オノマトペの割合が増えて漢語系の割合が減ったこと、和語系オノマトペに漢語・漢字を宛てる割合が減ったことなどから、俗語である和語系オノマトペが、抵抗感なく使われるようになり、漢語の助けを借りずに小説の言葉として認められるに至ったと考えられる。

和語系と漢語系が対応するものうち、「〇つ〇り・〇ん〇り」型が比較的多く見られたが、漢語を宛てるということは、和語系と漢語系とで同じ意味を表すものが並立している状態であることの意味する。その際、和語系のもものが対応する漢語と比べてより俗語的なイメージを持つ語であったために、漢語を宛てて使ったのだが、やがて並立していた和語系のもものが独立して使用されていく過程で、和語系のもものがオノマトペとして意識されていき、漢語系のもものは一般語彙として、「オノマトペ」性を失っていったのだろう。このことを漢語系の方から考えると、まず和語系オノマトペと音の構成が同じ「―タ」型のもものは、限られた文脈で使われるうちにその語のイメージが定まり、言語音と指示内容に有縁性を感じさせるようになる可能性がある。さらに、漢字ではなく仮名書きがされるようになれば、漢字の表意性が薄れ、音のイメージで使用される「オノマトペ」になると判断される。一方「―然」型は、振り仮名と併用されたために、和語の意味が先行

し、オノマトペらしきを感じさせなかったのだろう。

また、各作品の和語系・漢語系オノマトペの特徴を簡単に見たが、オノマトペにも、作家の語彙選択の意識が現れているようであった。明治二〇年代から三〇年代にかけて活躍した作家が、漢語の表現力に頼るのに対し、三〇年代後半以降に活躍する作家の多くがほとんど漢語を使わずに和語の語彙を抵抗なく取り入れていくという違いが見られた。

明治後期には和語と漢語の意識が変わったが、漢語系オノマトペに対する意識もそれに伴って変わっていったことが窺われる。表記という点では、時代が下って漢語系のものが仮名書きされる例が多く見られるのかどうか検討したいところである。

注

- (1) 本稿では「オノマトペ」を擬音語・擬態語の総称の意味で用いる。
- (2) 拙稿「明治前期の和語系・漢語系オノマトペについて―『浮雲』を中心に―」『上越教育大学研究紀要』一九卷二号(平成二二年三月)
- (3) 飛田良文『東京語成立史の研究』東京堂出版(平成四年九月)四四二頁
- (4) 「平凡」「野菊の墓」「芋掘り」は『日本近代文学大系』(角川書店)、「女難」「田舎教師」「微光」は『筑摩現代文学大系』(筑摩書房)、「破戒」は『藤村全集』第二卷(筑摩書房)、「青年」は精選名著複刻全集(近代文学館)、それ以外の作品は『明治文学全集』(筑摩書房)に拠った。
- (5) 「一然」については、前回同様「自然・当然・公然」を対象

外とした。これらに宛てられた仮名が「おのずから」「あたりまへ」「おおびらに」等一般語彙の副詞であり、事物の様相を表している意識が薄いと思われるからである。また、「子音の拍を重ねたもの」「同じ韻をもつ拍を重ねたもの」について、全てを網羅しているわけではないが、調査作品の範囲では認定基準を統一しており、和語系と漢語系の割合を見る上では大きな支障はないと思われる。

- (6) 前回の調査に基準を揃え、和語系のものからいくつかを除外している。例えば「ちよつと」「ちやうど」は慣用化されていると考え対象から外した。実際に、「放浪」に「鳥渡(ちよつと)」「四七例」「破戒」に「丁度」九七例、といった偏りが見られ、和語系オノマトペとして考察する際に不都合が生じてしまうことも考えられる。また、「しみじみ」「つくづく」「せいせい」など連濁を起こすもの、「ぶらつく」などの派生語は除外したが、「しつかり者」など複合名詞となるものは含めた。

- (7) 表には略号で示した。「浮雲1」は「浮雲第一篇」の略である。
- (8) 「オノマトペの研究」『東京女子大学言語文化研究』三号(平成六年八月)七九頁
- (9) 「近代における二字漢語『一然』の展開と定着」『言語科学論集』(東北大学文学部)二号(平成一〇年十一月)一三九(6)・一三八(7)頁
- (10) 『新美辭學』島村瀧太郎 明治三五年 早稲田大学出版部 「第二章 詞藻論」の中の「第七項 譬喩法」
- (11) 金田一春彦氏の分類に拠る。
- (12) 「余が言文一致の文章」明治三九年五月『文章世界』一卷五號
- (13) 吉田精一「花袋文学の本質」『明治文学全集六七 田山花

袋集」解説

(14) (13)に同じ。

(15) 小野寺学氏は前掲論文(9)で、『あらくれ』に「一然」の熟字使用率が高いことから、紅葉の門人だった秋声が「紅葉の影響を多分に受けて」おり、それが「用語に反映された」と述べているが、オノマトペの宛て字の面からもそのことが窺われる。

(16) 「漢字をあてる」多情多恨」表記考」『大阪外国語大学学報』二九号(昭和四八年)一三一頁。なお玉村氏は紅葉の漢字表記に関して、「語としての和語よりも、表記としての漢字の方に、明らかに強い意識がはたっていた」と述べている。

(17) 玉村文郎氏が、一九一五―一九三八年の文学作品一〇七編の音象徴語数を調査したものと、長塚節の「土」は使用数で第三位に位置している。(尾崎紅葉・幸田露伴の漢字―多情多恨」と『五重塔』―『漢字講座』9 近代文学と漢字」明治書院 昭和六三年)

(18) 三島由紀夫は『文章読本』の中で「次に私が森鷗外に學んだのは擬音詞(オノマトペ)を節約することであります」「鷗外はこのやうな擬音詞の効果を嫌って、その文學は最も擬音詞の少ないものであります」と述べている。

(19) 「鷗外と漱石の作品にみる漢語のオノマトペ」『相模女子大学紀要(人文・社会系)』五四A(平成三年三月)

主な参考文献

浅野鶴子編(一九七八)『擬音語・擬態語辞典』(角川書店)
天沼寧編(一九七四)『擬音語・擬態語辞典』(東京堂出版)

尾崎知光(一九六七)『近代文章の黎明』(桜楓社)
筧壽雄・田守育啓(一九九三)『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』(勁草書房)

飛田良文(一九九二)『東京語成立史の研究』(東京堂出版)

特集 擬音語・擬態語(一九八六)『日本語学』五巻七号

特集 擬音語・擬態語(一九八九)『日本語教育』六八

特集 あて字(一九九四)『日本語学』一三巻四号

特集 あて字(一九九四)『日本語学』一三巻四号

A Study of Onomatopoeia in the Second Half of the Meiji Era

Michiko NAKAZATO*

ABSTRACT

This paper attempts to discuss how onomatopoeias originated from Japanese are related with those from Chinese in the second half of the Meiji era. For this purpose twenty stories were investigated in the study.

In the second half of the Meiji era, a large proportion of onomatopoeias became Japanese origin, and they were used independently without the assistance of substitute character. It means that Japanese originated ones were used more positively even in the novels, although they were considered as slung in those days.

Regarding the Chinese originated onomatopoeias, it is necessary to examine the relations with kana written at the right side of kanji which was those of Japanese-origin, and the main types of onomatopoeias. The onomatopoeias of Chinese origin which were used as substitute character for those of Japanese origin, came to lose the features as onomatopoeias. But one type, which was the same sound type of Japanese origin, obtained the sound image and was possibly recognized as onomatopoeias.